

本日お読み頂いた創世記 38 章には、ヤコブの 12 人の息子たちのうちの一人であるユダの家系に起きたひとつのショッキングな事件が書き記されています。この事件は、ユダがほかの兄弟たちから離れ、カナンカナンの地に住むようになり、そこで現地の女、すなわちカナン人の娘を見初め、彼女との結婚生活に入ったという事柄をきっかけとして生じた事件であり、ヤコブの家の信仰の破れを示す事件でした。約束の民としての血筋、系列から離れて、カナン人と一緒に暮らし、カナン人と結婚することによって、混血、同化が進むということは、ユダの家系がやがてイスラエルの系譜から消滅する危機に直面したことを意味します。本日の 38 章のひとつ前の 37 章では、ヨセフが兄たちに妬まれ、穴に放り込まれるという事件が書き記されています。また、すぐ後の 39 章では、ヨセフがポティファルというファラオの侍従長の家で仕えた話が描かれています。神とともにある生涯を過ごしたという高潔なヨセフを描く「ヨセフ物語」と、本日のスキャンダルにまみれるユダの家族の物語とが、いったいどのように論理整合的につながるのか、それを説明するのは困難なところですが、しかし、驚くべきことに、本日の 38 章に登場するユダ、タマル、そしてペレツとゼラは、何と全員、マタイによる福音書 1 章のイエス・キリストの系図にその名が登場するのです。ここには、明らかに創世記の記者の意図を読み取ることができます。それは、イスラエルの救済の歴史には、アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフと続く父祖たちの系譜、正統的な系譜に加えて、もう一つの救いの系譜、ユダの家系（ダビデ王家の系譜）があるということを記者が示そうとしたということです。このユダの家系は、義理の父の子種を宿すことによって子孫を残そうとしたタマルという異邦人の嫁の命懸けの行動によって維持されました。その行為は、神の民イスラエルにとって、とてもふさわしい行為とは言えませんでした。むしろ、律法で禁止される行為、不道德な行為でした。にもかかわらず、このタマルという女性は聖書がしるす救済史のなかで燦然と輝いています。わたしは、そこに弱く小さくされた者への憐れみと罪の赦しを多く聖書のメッセージ、福音を読み取ることができると思うのであります。

そこで本日の物語の内容に入ってゆきます。38 章の 1 節を読みましょう。「**そのころ、ユダは兄弟たちと別れてアドラム人のヒラという人の近くに天幕を張った。**」前の口語訳聖書では、ここは「**そのころ、ユダは兄弟たちを離れて下り**」と訳されていました。巻末の地図の「3」をみて頂くと分かりますが、お読み頂いた 14 節に登場する「ティムナ」という地名が掲載されています。（ペリシテと太い字で書かれている地名の右側です）つまり、ユダが移り住んだ先はヘブロンという、アブラハムとサラの墓がある場所からみると西側、地中海寄りになります。それは、ユダがヘブロンヘブロンの山地からペリシテの平地に下って行ったことを意味します。ゆえに、口語訳は「**兄弟たちを離れて下り**」と丁寧に訳したのです。しかし、ここにはもう一つの意味が込められています。それは、地理的な下降が契約の基準における下降、つまり霊的・信仰的な下降をも意味するという事です。平地のほうが移動が便利ですし、何よりも遊牧民にとっては放牧の仕事が楽になります。思い起こせば、創世記 13 章で、アブラハムとロトとのあいだで牧草地をめぐる争いが起き、互いのテリトリーを決めようという話になった時、ロトは潤ったヨルダン川沿いの低地を選び、アブラハムは西側の山地を選んだという事がありました。しかし、ロトが選んだ低地にはソドムとゴモラがあり、その住民たちは、道徳的に墮落し、主の目に悪と映る行為を重ねていた。もしかしたら、聖書の記者には、便利でゆたかな平地は、人の信仰を墮落させるという思想があったのかもしれない。

こうして、ユダはカナン人の女と結婚し、彼女との間に 3 人の男子が生まれます。長男の名はエル、次男はオナン、3 男はシェラといました。6 節以下を読みましょう。「**ユダは長男エルにタマルという嫁を迎えたが、ユダの長男エルは主の意に反したので、主は彼を殺された**」長男エルが、主の前にどのような罪を犯したのかは明らかではありません。ある註解者は、結婚関係を壊してしまうような重い罪であったと言います。ユダの家に起こることは、家族の中で連鎖する罪の積み重ねの結果ではないかと思われまます。そこで、ユダは当時のユダヤの慣習に従い、家系を絶やさないために長男が死んだときは、その弟（次男）と兄嫁とが結婚するというやりかた（これを律法ではレビラート婚と呼びます）を採用しました。これによって、タマルはユダの跡継ぎの母親となる権利を得ることが出来たのです。このような結婚は、古代オリエントで広く採用されていた慣習でした（申命記 25 章 5 節以下参照）。ただ、それは必ずしも、喜んで行われたもの

ではなかったようです。ここでも、次男であるオナンは、子どもが自分のものにならないことを知って、タマルの天幕に入る時にはいつも子種を地面に流したとあります。兄のための世継ぎをもうけるということが不本意だったのでしょう。一家の次男としての責任を果たさなかったこのオナンの行為は、主の意に反する行為でした。そこで、主はオナンも殺されたと記されます。父親であるユダは、タマルと結婚した息子たちが、このように次々に亡くなる現実をみて、タマルに不安を抱きました。この嫁は不吉な女、わが家に不幸をもたらす女ではないかと思った。そこで、彼女に次のように言います。「わたしの息子であるシェラが成人するまで、あなたは父上の家で、やもめのまま暮らしていなさい」(11節)。しかし、ユダは息子シェラをタマルに与えるつもりはありませんでした。本心を伝えず、問題解決を先延ばしにしたのです。

本日お読み頂いた箇所は、このあとタマルによって起こされた出来事が書き記されているところです。12節に「かなりの年月がたって、シュアの娘であったユダの妻が死んだ」とあります。「かなりの年月がたって」とはユダの3男シェラが成人するのに十分な年月がたったという意味です。しかし、事態は何ひとつ変わりませんでした。ここに至って、タマルはユダの不誠実、自分が欺かれたことを悟ります。しかし、彼女はそのまま黙って引き下がるということはしませんでした。妻を亡くし、正規の跡継ぎが生まれる可能性を失った義父ユダの事情を知り、ユダによって跡継ぎを得ようと決心します。そこで、彼女は羊の毛を刈るお祭りの季節に、ユダがティムナにやってくるという知らせをうけて、娼婦の姿に変装し、その顔を隠してユダを誘惑するのです。ここの部分の注解をよむと「妻を失ったユダが、このようなカナン的な雰囲気の中で誘惑されることに、タマルは自信を持っていたのかもしれない」とありました。タマルの計略にユダはまんまとはまってしまいます。このとき、タマルが代価として求めたものは、ユダがもっていたひものついた印章でした。身分証明を表すものです。タマルは、最初から入念に、周到な計画をもってこのことを決行したのです。やがて、タマルの妊娠のことがユダの耳に入った時、ユダは怒って言いました。「彼女を引きずり出して焼き殺してしまえ」しかし、これはあまりにも勝手な言いぐさでした。子どもの父親は自分なのです。もっとも、創世記の筆者は、この時のユダには妻がいなかったこと、この女がタマルであることにユダが気付かなかったこと、それに気付いてからは二度と彼女と関係しなかったことの3点を書き記しています。ユダを一方向的に非難することが筆者の本意ではなかったということです。では、筆者の目的は何だったのでしょうか。

わたしはここを読みながら、思わされました。タマルは、契約の民であるイスラエルの血筋を受け継ぐユダの家に嫁ぎ、その跡継ぎを産むことが自分の一番の使命だと考えたことだろう。ところが、その意に反して夫を次々に失い、失意のうちに自分の運命を悲しむこともあったはずだ。嫁ぎ先の家から追い出されるようかたちで父の家に帰り、寡婦として暮らす立場は、さぞかしみじめだったことだろう。再婚の約束も破られた。そこで、彼女は、ユダの跡継ぎを生むという使命を果たすために、律法で禁じられた行為、死刑に処せられても仕方ないような大きな賭けにでて祝福を勝ち取ろうとした。そのような命懸けの覚悟、使命感がはたして自分にあるだろうか。彼女が行ったことはたしかに不道德な行いであり、律法違反かもしれませんが。しかし、彼女は嫁ぎ先から追い出された女であり、祝福を奪い取られた女です。こうするよりほかになかったのではないか。彼女が捕えられたとき、最後の弁明としてこう言いました。「わたしはこの持ち主によって身ごもった」そして、印章をユダの前に見せます。これを見てユダは認めざるを得ませんでした「わたしよりも、彼女のほうが正しい。わたしが息子シェラを彼女に与えなかったからだ」

冒頭にのべたように、このタマルの命懸けの行動によって、ユダの血筋、家系が維持されることになりました。そして、このユダ族からダビデ王が生まれ、さらにイエス・キリストが生まれます。救い主イエス・キリストを生んだユダの家系は、決して優れた人、完璧な人たちの集まりではありません。むしろ、人間の持つ弱さや罪、人の世の悲しみやいくつものスキャンダルを経験した罪人たちの集まりでした。しかし、わたしは思うのです。神はご自身の救いの歴史において、人間のもつ弱さや欠け、人の世の悲しみや人間が犯した罪さえも受け入れ、赦し、それらマイナスの事柄を逆に祝福の基へと変えて下さるおかたではないかと。本日の創世記38章に登場するユダ、タマル、そしてその子ペレツとゼラは、全員、マタイによる福音書1章のイエス・キリストの系図にその名が登場いたします。不義な嫁タマルの命を懸けた律法違反の行為は、イエス・キリストの十字架の出来事によって、今も贖われ、意味を与えられ、現代に生きる私たちにとって救いとは何か、信仰に生きるとは何かという問いを投げかけているのであります。

お祈りいたします。

